

エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界 (その16 「四季」の中の昆虫—海外編)

昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

海外の「四季」の曲に移る。アントニオ・ヴィヴァルディ (1678～1741) の《四季》は春夏秋冬で完結する曲に思われがちだが、ヴァイオリン協奏曲集「和声と創意への試み」全12曲の第1曲から4曲である。

それぞれ急緩急3楽章の伝統的な様式で、すべての楽章にソネット (14行詩) が添えられている。その中の動物は夏の第2楽章のハエ、春の第1楽章の小鳥、夏の第1楽章のカッコウ等の鳥、秋の第3楽章に顔を出す猟犬である。曲は描写的でハエの部分では農夫を困らせる様子がヴァイオリンで表される。

ヨーゼフ・ハイドン (1732～1809) は車大工の息子で子供時代を農村で送った人である。その生い立ちのためだろうか、オラトリオ《四季》では農家の労働や神や自然への感謝と畏敬が謳われる。春には蜜蜂が巣から飛び立ち、夏にはコオロギが草の中で歌う。ウインナ・ワルトの始祖と呼ばれるヨーゼフ・ランナー (1801～43) の《四季》では嵐や狩等が軽やかに表されるが動物は出てこない。

ファニー・ヘンゼル (1805～47) はフェリックス・メンデルスゾーン姉妹の姉で、弟と同じく優れた作曲家であった。彼女の代表作の一つピアノ曲集《12か月》やフェリシアン・ダヴィド (1810～76) の耳当たりがよいだけの弦楽五重奏曲《四季》、他の作曲家の同名曲を意識して作られたらしいイサーク・アルベニス (1860～1909) のピアノ曲《四季》に特定の季節は感じられず、インドの「四季感」を表現したジョン・ケージ (1912～92) の《四季》は一般的な季節のイメージからかけ離れる。

ピョートル・チャイコフスキー (1840～93) のピアノ曲《四季》は1月から12月までの風物を表した曲で6月の〈舟歌〉11月の〈トロイカ〉は誰も耳にしたことがあるだろう。3月の〈ひばりの歌〉では美しい鳴き声が哀愁を帯びて表現される。フーゴ・ヴォルフ (1860～1903) のゲーテ歌曲集の《四季すべて春》では春の喜びを色々な花と恋人の美しさで歌う。アレクサンド

ル・グラズノフ (1865～1936) のバレエ音楽《四季》はロシアの凍てつく冬から始まり春の鳥を経て星座を仰ぐ秋で終わる。

クラシックとジャズにタンゴの語法を取り入れ独創的な曲を産んだアルゼンチンのアストル・ピアソラ (1921～92) の《ブエノスアイレスの四季》ももともと四季を意識して作られ始めた曲ではない。様々な楽器の協奏曲を作っているフィンランドのカレヴィ・アホ (1949～) のテルミン協奏曲《八季》。曲名はラップランドのサーミ人が一年を八季に分けることからきており、収穫から雪や霜、白夜を経て収穫に戻るサイクルを不思議な電子楽器テルミンの音で描写した。

このあたりで紙幅が尽きた。時代を追っていくつかの《四季》を駆け足で聴くと、自然を描写した曲の中で昆虫は片隅を占めるだけだ。日本と海外を比べると昆虫の存在感は日本の作曲家に軍配が上がるようである。

音楽用語で、曲が表そうとする題から聴き手を一定の方向に導き、題材と結びついた文学的・絵画的などの内容と関連した表現や暗示を目的とする器楽曲を「標題音楽」と呼ぶ。「四季」はまさに標題音楽的な曲名だが「これが春なの？」と首をかしげる曲もある。聴き手の私が悪いのだろうか。



ヴィヴァルディ 「四季」
ACCENT ACC 24179